

小説

湯郷将和

萩市
(1931～1988)



【著作】

『遠雷と怒濤と』（昭和57・日本放送出版協会）
『キサク・タマイの冒険』（昭和64・新人物往来社）
『黎明』（平成15・叢文社） ほか

江戸時代萩を後にする人が故郷を振り返り見た場所に、現在松陰先生
の歌で有名な「涙松の遺址」が立っている。昭和十年代までその場
所に大きな松が十数本亭々と空高く聳えていた。

湯郷将和（本名吉岡和雄）は昭和六年（一九三一）にこのすぐ近く
で生まれ、毎日これらの大樹を見て育った。五人兄弟の長男、明るい
性格であった。「昭和十九年、旧制萩中に入学したときは、長くて
二十五年の命と思っていた。陸軍幼年学校を轟沈し、それなら飛行機
に乘ろうと肚を決めた直後に大戦が終わった」と回顧している。高校
時代瘦せて背が高かった彼が、相撲部で土と汗にまみれながら「ブツ
カリ稽古」をしていた姿は忘れられない。当時の部活動を中心とした
学園風景を「叶井先生」という文章に面白く描いている。卒業して山
口大学に入学したが、三カ月後に中退した後上京して二松学舎大学中
国文学科に入学した。その後彼は次々に作品を書いて幾つかの同人誌
を通じて発表した。

昭和五十六年（一九八一）、五十歳のとき、『遠雷と怒濤と』で第一
回放送文学賞を受賞し、彼はNHKの専属ライターに抜擢された。し
かし一般大衆を視野に入れた協会の考えと意見が合わず、折角の機会
を棒に振った。彼は世に有名な人ではなく、誠実で気骨のある人物を
発掘して世間に知らせたいとよく言っていた。自らもそうした生き方
を選んだと云える。

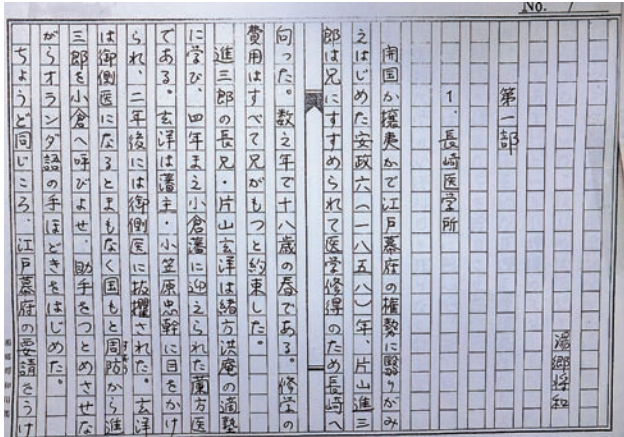
こうした考えのもとに書いた作品が、彼の死後出版された『キサク・
タマイの冒険』である。早稲田大学の長澤和俊教授は「幸いこのたび
湯郷将和氏の努力により、玉井家に残る多くのメモ、寄せ書き、『東亜』
等から、玉井喜作の生涯がノンフィクション・ロマン風に再現できた
ことは、まことに喜びに堪えない」と推薦の辞を寄せている。

『遠雷と怒濤と』の出版の翌年から、「開花堂盛衰記」を『印刷ジャー
ナル』に連載し始め、昭和六十三年（一九八八）、死の直前まで書き
続けた。この作品は、妻の洋子により最後一部加筆され、『黎明』と
改題して出版された。「日本のフロンティア魂の発掘した不朽
の歴史文学 医学・新聞・印刷・造船……裏から見たもう一つの明治
維新」を描いたと紹介文にあるが、この大河小説こそまさに作家・湯
郷将和のライフワークである。五十七歳の急逝は惜しまれてならない。

（文・山本孝夫）



主要三部作



「開花堂盛衰記」の直筆原稿

湯郷将和 年譜

（提供・吉岡洋子）

4月4日、父東作、母アサコの五人兄弟の長男として、萩市椿区大屋に生まれる。 本名吉岡
和雄。

3月、萩市立椿西小学校卒業。 4月、山口県立萩中学校入学。 相撲部にて活躍。

3月、山口県立萩高等学校卒業。 4月、山口大学英文科入学、 7月中退し帰郷。

文学への夢昂り、9月上京。『新表現』『日通文学』『文芸首都』に入会。 田代儀三郎、
庄司総一、伊藤桂一氏等を知る。「叶井先生」他習作多数。

4月、二松学舎大学中国文学科入学。 詩「或る女」を『新表現』に、小説「枯野に生
きる男」を『日通文学』に発表。 原卓也氏を知る。

3月、結核との診断と経済的理由で帰郷。その後結核は誤診とわかる。 帰郷後萩市に
おいて『防波堤』『椿文学』創刊に加わる。

3月再度上京、同人雑誌連盟名鑑（ガリ版）を作成、以後一九六一年まで会報を編集、
印刷。

同人雑誌評を継続、同人雑誌連盟の事務局を担当。 2月、黒澤洋子と結婚。 3月、日
本規格協会に入社。

『田無民報』に毎週二十―三十枚の原稿を書く。

小説集『路傍の草』（私家版 二百部限定出版）
「吉田稔磨」を書き始める。 長男郁郎、膠原病にかかり、妻洋子、自律神経失調症ひどく、
筆進まぬ。

「叶井先生」「余生の貌」を『虚実』や『日通文学』に発表。 4月、母アサコ逝去。

「深い河」「群像」一次に残る。「遠雷と怒濤と」四百枚書く。

「遠雷と怒濤と」放送文学賞受賞。『放送文化』に6月から10月まで連載。 印刷屋廃業。
『遠雷と怒濤と』日本放送出版社より出版。 NHKテレビより三回に分けて放映。「開
花堂盛衰記」を『印刷ジャーナル』に10月より連載開始、一九八八年、死の寸前まで
続ける。

「ガラハニ―事始」を『歴史読本』に発表。

「香港の人・上」を『新作家』に発表。

「キサク・タマイの冒険」完成。「創刊に寄せて」を『カオス』創刊号に発表。
3月頃より体調を崩し、6月18日入院、7月11日昭和病院にて死去。「香港の人・中」
を『新作家』に没後発表。「開花堂盛衰記」は8月まで書き残された原稿で連載されたが、
その後妻の洋子が生前聞いていた粗筋によってまとめ、『黎明』として、二〇〇三年に
叢文社より出版。

『キサク・タマイの冒険』は新人物往来社より出版。 他に生前、地元の週刊新聞『東興通信』
に新年随想を四年連続で掲載した。

明治二十六年（一八九三）二月一日の夜十一時
ごろ、ウラジオストックの大通町を一人の日本人
青年が歩いていった。あたりは一面の闇に包まれ、
ほかに通行人の影もない。 冷えこみはきびしいも
の、路面に雪がないので青年の足どりは軽い。
青年の名は玉井喜作。 無鉄砲にも、これからシ
ベリアを無一文で歩こうと計画し、旅費かせぎか
たがたロシア語を習うために、ウラジオのドイツ
商館で働いている。 何日ぶりの洗湯（浴場）で
温まり、喜作は急ぎ足に下宿へ帰る途中である。
大通りと交差する鉄道の踏切り近くまで歩くと、
闇の中に四人の大男が立っていた。 ロシア人の警
官らしいな、と思いながら喜作が行きすぎようと
したとき、ふいに警官の一人に呼びとめられた。
「ちょっと待て。 こんな夜おそく、どこへ行くんだ」
「風呂の帰りだよ。 下宿へ帰るところさ」
喜作はドイツなまりのあるロシア語で答える。
ウラジオに来てまだ二カ月たらずだが、語学の天
才といわれた喜作は、もうロシア語の日常会話に
不自由しない。
「われわれは夜の警戒にあたっている。 怪しまれた
くなかったら、五ルーブル出したまえ」
いきなり警官の一人が喜作の肩を掴んだ。 団扇
のように大きな手で、びつくりするほどの握力が
ある。
とっさに喜作は、相手の言うことを深刻には受
けとめなかった。 かねがねロシア警官の横暴ぶり
を噂にきいているものの、実際に眼で見たことは
ない。むしろ素朴でお人好しのロシア人ばかり知っ
て、警戒心も薄れている。

（『キサク・タマイの冒険』より冒頭部分）

湯郷将和